

When You Wish Upon a Star 演奏の手引き

(文・アレンジャー 宮嶋みぎわ)

皆さんで存じのディズニーの名曲 When You Wish Upon a Star (星に願いを) を、少し込み入ったハーモニーで大人っぽく仕上げたアレンジです。元の曲が持つかわいらしい童謡という雰囲気のを離れ、いかにこのアレンジが持つ美しいハーモニーを味わっていただくかで、仕上がりが決まってきます。

参考音源)

この曲のアレンジでは、Bob Brookmeyer という名作曲家・アレンジャーのハーモニー手法を参考にしました。Brookmeyer 氏作曲の楽曲が多く含まれるアルバムなどを聴き、特有の和音に慣れ親しむことで、このアレンジの演奏にも良い影響があるはず。是非参考にしてください。上の2つは同氏の曲のみが収録されたアルバム、一番下は、同氏の曲が複数収録されているアルバムです。

Bob Brookmeyer and New Art Orchestra 「Spirit Music」

Mel Lewis Jazz Orchestra 「Bob Brookmeyer, Composer, Arranger」

(このCDはLive at the Village Vanguardという別のタイトルでも販売されています)

The Vanguard Jazz Orchestra 「Monday Night Live At The Village Vanguard」

□ テーマの「伸び縮み」について

このアレンジを聴いてすぐに分かるのは「星に願いを」の元々のテーマとは違う音の伸ばし方をしているという点です。最初は奇妙に感じるかもしれませんが、参考CDや練習の録音をじっくり聴きながら、音が伸びているところの和音を味わってみてください。すると、音が伸びている箇所は、単に「奇妙にするために」音を伸ばしているのではなく、伸ばすことによって心が落ち着くような効果が出ていることが分かんと思います。誰かと会話をするとき、大切な言葉ほど、逆にゆっくり時間をかけて言う場合がありますが、それと同じような感覚だと思って下さい。この「気持ち落ち着くなあ」と感じる部分では、軽いデクレッシェンドをかけて、自然に減衰していくかのような雰囲気を出せると、ナチュラルに良いムードで演奏が出来ます。

それ以外の箇所も、この曲のメロディの歌い方は、メロディの上昇・下降に合わせて自然な音量になるようにしていればOKです。上に行く方が少し大きめの音量、下に行く方がすこしリラックスして小さめの音量です。その際、大きめの音量になることで、音質が堅らないよう、注意しましょう。いつも、温かな音色で吹くことが必要なアレンジです。

□ よいハモりを生み出すために

このアレンジで使っているハーモニーはどちらかというと複雑で、難易度の高いハーモニーです。このようなハーモニーをきれいに成功させるためには、手間が掛かりますが以下のような手順を踏むと効果的です。

(以下の全てのハーモニー練習では、下のパートから音を積みましょう。下の人が土台を作り、その上の人はそこにずっと載っかる、が基本です。)

・TBセクションとベースが最初に吹いてハモを作る。

・TPセクションだけでハモを作る。

・TB+ベースの5人の上にTPセクションが載る。

・ここまでの響きを確認した上で、SAX セクションだけでハモを作る。SAX だけで吹いても、さっきの、プラスベースと似た響きが作り上げられているはず。

・1ベース、2TB、3TP、4サクスの、順で音を足していってハモを作る。後から参加する人たちは、先に音を出している人たちが作ってくれた土台の上に乗って組み体操をするイメージ、もしくは、ジャングルジムみたいなのをもう作ってくれている骨組みの間に、後から入りこんで行くようなイメージで吹く。逆に言うと、先に音を出した人たちは、後からそこに誰かがやってくるわけなので、しっかり支えてあげられるだけの広ーい面積で「あたたかく受け止めて上げる」ような感じの音を出していないといけなわけ。指一本出して、ここに載れば?では誰も載れないわけ。何人も載ってきて崩れないようなしっかりとした土台を、暖かい気持ちで広げて待つ。これは大変

重要なことです。後から入っていく人たち、決して、がっつり音出てるな、負けないようにしなきゃ!同じ分量だけ音を出さなきゃとか「対立構造」みたいな考え方をしないこと。それだと、スパイクの着いた靴で組み体操で誰かのの上に載るようなものです。そんなんでも良いハモになりますか?と自分に問いかけてください。載つけて貰いやすい姿勢と心構えで載っかることです。

※この練習では、ピアノとギターは休み。参加しないこと。吹く楽器だけで演奏したときにハモがどう作られているかが分からなくなってしまうので。

※ただし、音が取れなくてみんなが困っている時は、そのハーモニーをピアノで代わりに弾いて上げて確認すること。これは大変有効です。

これで上手く行かない場合は

ハーモニーの勉強をして、コードの基本音を奏でている人よりもテンションの人の音量を少しだけ小さめにするとうまくハモります。これはコードや和音の勉強をすればするほど上手く出来るようになってきます。主にSAXとTPの3-4番の方達にこの能力が要求されることが多いです。

□ リハーサル番号[C]からリハーサル番号[H]からの打ち込みについて

このような表記になっている場合、すごく短い音で演奏することもあります。このアレンジにおいては全ての音を少し長めに演奏し、1つ1つの音についているハーモニーが「きちんとハーモニーとして聴き手に認識されるように」心がけてください。この手前まで重厚なハーモニーを吹いていたのに、ここから急にハーモニーが聞こえなくなってしまうと、寂しい残念な感じの演奏に聞こえてしまうので、気を付けましょう。

□ トウツティ (リハーサル番号[F]から)

この曲のトウツティでは巨大な音をがっつーんと出すようなシーンは出て来ません。音量が最大になる箇所でも、ハーモニーが美しく響いている必要がありますので、大きな音を出そうとやっきになって音質が悪くなってしまうと、全体のハーモニーに影響してしまうということを覚えておきましょう。

トウツティ部分もテーマと同じく、メロディの上昇下降に合わせて、自然に微量な音量調節をしながら吹いてみましょう。このような箇所では、大きくすることにはばかり目が奪われがちですが、どこを「抑えるか」を考え、決定することも実はとても大事で、そうすることで音量を無理に大きくしなくてもイキイキと躍動感のあるトウツティに仕上げられます。

□ ソロについて

TB ソロもベースそろも、元の「星に願いを」に基づいていますが、少し変わったコード進行で、小節の長さも少し変更しています。これも、テーマの時と同じく、コードが「伸びているところ」は、伸びていることによって少しゆったり感じられることを楽しみながら演奏していただければ幸いです。コードの響きや進行に慣れるまでは、ピアノでコードを弾いてみて(もしくはピアニストに弾いて貰ったものを録音して) 何度も聴き、そのコード進行を味わい、コードの流れが自分の中に入り込んでくるようにすると、心のこもったソロを吹きたい時には効果的です。

□ エンディングノートについて(235小節目)

エンディング一番最後の音は、その手前でなるべくしっかり息を吸い、長めにたつぷりと演奏しましょう。ハーモニー重視のアレンジの一番最後の音ですので、温かく良いハーモニーで締めくくり、最後の一音まで聴き手の皆さんに味わっていただきますように。